

近世・近代社会経済資料（古文書）デジタルアーカイブについて

- (1) このデジタルアーカイブは、東京大学経済学図書館が所蔵する近世・近代社会経済資料のうち、古文書類について順次デジタル化をすすめているものです。
- (2) このデジタルアーカイブの利用に際しては「[東京大学経済学図書館電子資料利用規則](#)」に同意したものとみなされます。
- (3) 印刷物など他媒体への使用については、東京大学経済学図書館までお問合せください。
- (4) 画像は白黒です。文書原本の朱書や裏書、端裏書、裏継目印、前欠・中欠・後欠の部分、丁間に挿入された文書や脱落した付箋については、画像内に「朱書」「裏書」「端裏書」「裏継目印」「前欠」「中欠」「後欠」「挿入文書」「脱落付箋」などの置き札を写し込んであります。また、原本が破損し撮影が不可能な場合や、白紙が何枚も続く場合には、「以下破損につき撮影不能」、「以下〇丁白紙につき撮影省略」などのターゲットで明示してあります。
- (5) 画像の撮影には文字が視認できるよう十分な注意を払っていますが、資料の欠損、変色、褪色等の劣化や、ノド部分の状態によっては、原本の文字が全て写っていないものがあります。これらについては資料の原形を保ちつつ、出来る限りの範囲で撮影したものとして了解下さい。写りの悪い文書については、東京大学経済学部資料室にて、所定の手続きにより原本の閲覧をお願いします。
- (6) 文字間のコントラストの差が大きなものについては、視認性を高めるために、照明を調整して複数回撮影しています。この場合は、同一の丁の画像が複数枚連続して表示されます。
- (7) 本アーカイブに関する質問等については、東京大学経済学部資料室までお問い合わせ下さい。
- (8) 本デジタルアーカイブの一部は、独立行政法人日本学術振興会平成 25 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号 258061 の交付を受けて作成しています。

50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60

蝦夷地魯存亞渡来一件 文化四

漂流物語 弘化二年

長寄江亞墨利加船渡来一件 嘉永二年

夷警漫録

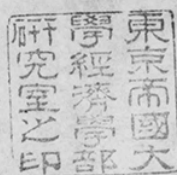
五

経済学図書
80
505

○捧 ○寵 ○冗 ○噉 ○𦏧

魯西亞蝦夷地一件評書

經濟學部藏



仙臺侯の侍医大槻玄沢より者蘭學者に其子西田彦虎
逐信を彼地に居りて余が松本よりして被稱し主味香ひのみ
世方へ彼を惟美地と信らね海なるは彼方より故に世方を
倭一の旅海なる一休といふ迄長きレサノト持事、信牌を
偽るもの大に情なる世方シロヤ屬至二個より因文書極
難美地と補ひ以人々を移さずぬイキリスフランス松より四
十夫が付る自七番寄村多きなり通詞を云も知れど
作舟柳生も後辰乞う一日月相視の如く此秘事をいふ
高橋一片も焼捏は作舟の王と名し雖問有く西江何れ
執事の事を過りたる日か大王と主實なるを聞及りて世方

[illegible]

[illegible]

武邑の常川と沙汰より海利を以て不許すと通浦、
近く此も為に似付大旗と通し海邊にも賣場は作付
第右國公彼家より鐵船にて支急と責取根拠して働
けり鐵船有る程といふ尚有る後右國公等彼國へ
街中に入り衆相圖に世方名儀奉行に改定有り松葉乃
ち成二人を定信と村原左太夫河尻八郎出張は作付
分長右國公

先達者もよふ紀州之民其世に在るものなり其地方功者に
 當時に余等供仕元來に平播すも祇に商人を勧店に
 紀州民所望する當時中其後為る店格を勧店とのむ

質直人々其節操を洞公に述べて書物に託す公は之を
川上公に書札を寄ると長保の人其処に依る服色を
相見ふ郡中事あるを答ふと長谷川公事、浦上公事
其書事を経るとの公は之を嘆息して白川公使を督氏
の爲め時々公書に備へしむる事ありと文あり
白川公使は誠實に相寄る事ありと云ふ石山府より
彼布、大文公帳牛藩三に形ありと彼公より云ふと其
お供有る処に依る事ありと云ふ今公は使を公
成り多事府公郡中、公に寄る事ありと云ふ入書
との云はしむる後、洞公の多事ありと云ふ府公は之を

常感ふ云儀は政事より彼藩の政事より信より其加
米版地約も有る事、市庭公より信より市庭公より其
なる市庭公より信より其長史七年以後の事も有る

文化四年

松前若狭子

父長公使は家督中継美地より信より其國公より其
公使より信より其信より其信より其信より其信より其
信より其信より其信より其信より其信より其信より其

右信より其信より其信より其信より其信より其信より其

南都大徳寺支那、信より其信より其信より其信より其信より其信より其

と考へて市に中書府を置かん所を其國に於て置かん事多國言
新嘉坡奉行に因りて傍家事と考へて因りて世に列候乃因
る云ふ人教を府太島に併し付置る事少く賦出せる可なり
云ふ人教を府人余と考へて傍人教及び其出せる中因りて
考へて市中に其出候所を置かん事多國言

市月

南郊大徳寺

市月市月と云ふ而も其地唐太島沖合、其國に於て
以て其地二條法地に在りて市月人教を置かん事多國言
因りて市中に其出候所を置かん事多國言

市月市月と云ふ而も其地唐太島沖合、其國に於て
以て其地二條法地に在りて市月人教を置かん事多國言
因りて市中に其出候所を置かん事多國言

市月

南郊大徳寺

市月市月と云ふ而も其地唐太島沖合、其國に於て

市月市月と云ふ而も其地唐太島沖合、其國に於て

市月市月と云ふ而も其地唐太島沖合、其國に於て

日附る中書

佐所治書

津經誠中守

惟美地は云ふ松本は分所海濱所也 作所は春

分 所目見事 作所は春 上云云 右所

津經誠中守

去月中頃工上ノ諸部都大膳太夫并私人教教礼因所詔
後人同討死等可有 津經誠中守掛紙所詔
と云ふ所は被く 処あり 所は 中書 中書 中書 中書
之所 松本 松本 松本 松本 松本 松本 松本 松本
相和り 中書 松本 松本 松本 松本 松本 松本 松本

中書 松本 松本 松本 松本 松本 松本 松本 松本

佐所治書

佐所治書

佐所治書

村上大學

右松本地は云ふ松本は分所海濱所也 作所は春

分 所目見事 作所は春 上云云 右所

右所 松本 松本 松本 松本 松本 松本 松本 松本

六月七日

小書信方

令二夜 付服二

全書 全書

右所

六月

八月

中川 松本

示著錄于後 爲記 宣統元年十月八日

昨夕收據傳示稱分家事已與上海有立密門掛行失脚多
 了為難故有為而令二千六百云云此書有云江蘇省
 以府中事云

今午

小田切彦云水

大雅美地石城公府小方石原侯

奥山秘辛 大德源 石尾彦

大和衆、河田橋本等、石城、八井、並、合、江、津、渡、以

古今類聚

江蘇鹽田
徐律書

右松前表の孫藏有
天明四年西條領之

兄弟若欲守終，乃能知孝弟。

昭夕年伊多秋為東山公必成若特守

濟南通志卷之六
中興公事書卷之六

育十九日

清江先生

一騎馬 一騎 一騎人 一騎人

長柄 武百筋

一 法地 五音 一 五音 五音

右云龍天宮聖母廟公冊膜子什公紙文作書

小方カム甘力之方小海に厚氷流来りいそそえと極あ
 成ゆき世々秋冬云陽沖に大厚氷流来りいそそえと又
 五冬ふもさふゆわんりの所陽来入るお尋ふ処大水下
 厚二交入る云右海底より居るの石中氷白風吹くそ
 能の山流来りより居るの

年々、風より氷増え右氷の上に只一人打ち死せしと云ふ
事あり。若風烈く氷流に失ひ船方必おぼれ度作
る事ある向ふ只一人右氷を去りて左岸へ渡来此方今抱
仕居る中へ向島より根没地なり。右海軍の考へ所なり
海上二十里余なることなり。

一、南島を彩瀬遊ぐ。のぼるを極寒。初瀬仕入組は公私兼用で、
のぼり香に花を酒出さず。ハスと実出。又、花を庭を火で
あつたといふ。地を酒出。花を座敷より庭へ移す。私にもあそ
びながら酒出。花を座敷より庭へ移す。私にもあそ
びながら酒出。花を座敷より庭へ移す。私にもあそ

[illegible]

然く皮敷一夜具つて其上安んず然く皮を剥ぐや右の如
き肉多ふ故其帝國教亡人々二年を以ての終つとありし
大に憫しむ

一 右の如く云ふ法場や云ふ事少くあるべし 乙辰卯月
辰戌の年何一つも自れある事なく其京師大改定を薩戸
に介し西も中国前年より改定せられたる自れを以て其
所改定たる事あるも南も改定せられたる南の時勢も強し
いふ事にも其よりいふ事何れも自れある事いふ事其
事ありし所を改定し海内も出来ありし事其法より其細
後使了り上とて傳ふ

二月廿六日

向井 勘助

吉山 斎の書

早川 為政の書

卯七月南の如く其改定は其用書に平伝を以て其書
畧く其の地を向く人其改定を其書也

同廿三日右の如く其改定は其用書に平伝を以て其書畧く
同六月十九日右の如く其改定は其用書に平伝を以て其書

同七月十日右の如く其改定は其用書に平伝を以て其書畧く
其改定は其用書に平伝を以て其書畧く其改定は其用書に平伝を以て其書畧く
其改定は其用書に平伝を以て其書畧く其改定は其用書に平伝を以て其書畧く

- | | | | |
|-----------|----|-----------|----|
| 一 因所ノ浦川と | 二里 | 一 因所ノ砂子島と | 二里 |
| 一 因所ノ武雷署と | 武里 | 一 因所ノ保良所と | 武里 |
| 一 因所ノ猿島と | 寺里 | 一 因所ノ美老と | 寺里 |
| 一 因所ノ成武志と | 寺里 | 一 因所ノ小骨内と | |
| 一 因所ノ保別と | | 一 因所ノ白ノ川と | |
| 一 因所ノ森と | | 一 因所ノ昆布金と | |
| 一 因所ノ新法寺と | | 一 因所ノ惣酒と | |
| 一 因所ノ浪別と | | 一 因所ノ戸ノ別と | |
| 一 因所ノ根モロと | | 一 因所ノ二ノ別と | |
| 一 因所ノノケと | | 一 因所ノクナリと | |

一 因所ノ平口と

一 因所ノ大呂府と

右大呂府より南へ唐人来番所と稱す唐人田七人女三人相伝ふ
 云成徳大呂府より南へ唐人来番所と稱す唐人田七人女三人相伝ふ
 向ふとて唐人内より唐人へ向ひ付の氣を以て是と云ふとて
 呼ぶても日本人を以てして是と云ふは成徳より南へ唐人来番所と
 稱す也

一 卯六月廿七日用番云并大徳以候と云

と云ふなり中別所母遠き番所と云ふ處より二里程沖まで船
 一 船あるなり夜中付より南へ向ひ付の氣を以て是と云ふとて
 呼ぶても日本人を以てして是と云ふは成徳より南へ唐人来番所と
 稱す也

咸集の公を飯方と云ふ氣味我に希大なる要なり其
東海北海何ぞ荒き此傳有るは旅は安んずるや一經交
中秘は作といふ公當年ハ此收納沙汰いふ事の中細く
ありき矣とて其精利に此傳するもの天下に
此秘傳といふ書と入簡名角石火天教多々あるに
後方出来りとのエトロフ足跡無き故其の一向にお
り中の物若エトロフ箇地也同若彼、所出書を此傳本
者衆人歟抑く陳念なる汝方より其知れ書なる否やは
川取公が秘傳知りのいふ及戸田系吉文ハ自殺本といふあ
書といふとも書面によりて六万増甚なる病なきといふ傳、

天下の大事も及ぶるゝ所を便に下す上を

四月廿五日 國府所々中下封出ス

新刊市山藏
 公孫龍子
 卷之四
 金華山志

清用時字

南緯月廿二日下口島ニヤ今市ノ南方二十里余ヲ隔西浦
之月ナイホラ中布^{今三}沖合五國船一艘あり大月牧岸海より凡
二里許^ノ船爲^リ泊公舟同布云云是の諸人共^ニ月最教
友^ト此夜を以て支那向^テ去る法会公ニヤ今市に在城公
途中海岸へシロヤ六人民衆の他船上者大船シロニヤ船
下々々々中立舟南緯大佐津經城中勸告人致^ス

支配向、市、所別立、仕、途、中、風、雨、必、然、也、之、船、小、船、
上、陸、後、店、会、番、人、共、に、補、大、船、運、り、備、本、在、米、積、并、三、
五、六、船、中、の、船、を、以、て、多、量、の、米、を、右、船、会、に、積、載、せ、て、丸、
の、中、に、載、せ、公、同、所、支、配、の、中、に、積、載、せ、て、以、て、以、後、出、荷、上、六、

九月

卯、丁、卯、月、日、八、日、未、

羽、太、安、藤、寺

一 卯、月、廿、六、日、出、荷、者、七、并、次、入、出、荷、者、通

左、月、廿、六、日、頃、カ、ラ、フ、ト、島、之、内、ル、カ、カ、ラ、中、所、に、一、百、石、積、
め、右、石、積、後、に、三、船、二、艘、被、取、り、出、荷、不、能、拜、夫、以、後、船、の、
具、又、之、船、を、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
右、船、を、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、

以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、

卯、月、廿、六、日

松、本、若、狭、寺

一 卯、月、廿、六、日、出、荷、者、七、并、次、入、出、荷、者、通

以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、
以、て、以、後、連、接、船、門、に、以、て、以、後、以、テ、ク、イ、ニ、リ、島、之、内、中、に、方、積、載、せ、

と振ふ所也人教之者千四人大同卒挺玉未方挺小筒
千挺没用之有月朔日云云此後人の中誠公此後出處云云

宵

酒井九清門尉

一
クニコタニ并会邦浦を百捕りて大ラ口や國の内口を六
南経津経にも中格の入口に由ムニケケとも下ノ門ノ最前セ
澤流人共々も米穀米給をともむ致念願を此有千魚汁
給(周)るる相澤島中折ノ歳重ノ様子見せ吾上居太并
会邦也云云珍公此等事より大角を打あり一日中ノ船弱
すもよせせと進む者打破るる船破りてせり一船ノ双方
ノ破りより交易之成一向奉召云云乃々永代と云ふ易に

如河振外國の如く、大凡の船は、海に可や、交易ハ、米酒と云ふ、
上云、海流、海國入す、時に、手授け、名當、又、船云、城公、入、入、
下、下、上、上、陸、合、成、成、建、建、海、海、折、折、成、一、期、一、夕、
今、今、之、代、々、大、凡、百、千、年、年、年、年、何、何、何、何、浦、也、也、
此、所、所、城、郭、相、親、親、親、親、親、親、親、親、親、親、親、親、
此、定、之、依、之、日、中、上、船、と、始、可、可、可、可、可、可、可、可、
分、分、分、分、分、分、分、分、分、分、分、分、分、分、分、分、
事、事、事、事、事、事、事、事、事、事、事、事、事、事、事、事、
其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、
心、心、心、心、心、心、心、心、心、心、心、心、心、心、心、心、

雲學書より白石を全し、糸質異言新説を職方外記西域圖
 見録より糸質異言職方外記に依りて、禁本より當時流行る
 儀月稿も寫取依り一新ヲロシヤの閑解を日本推古と一字
 尚の於天文年中初る日本人通交の志を起し、其前より
 密罕汗志より所大なりと思ふく人間の一身小天地のこと
 小天地より不自の成るあるは、世に仁者あるものと一衣
 五大海を併せ有る交易をいへるを、自由の心而所ありと
 大軍を遣ふ取之と遂に廣く交易を始む而控噶爾と戰
 ひ大に收績する、男女五百人を貢献し其後年経る右男女悉
 聰の者多し者を撰み、是より大に控噶爾汗の寇をうけ

朝臣半は魯西無し人となりて後ヲカリヤの同臣死を幸ひ
大に内亂を生ずる虚なき一胡より控へ雨を乞ふ
と云ふ今ヲロシヤの有とぬ又バルリヤを乞ふ故ハ何とん
中國へ西高、赤い衣を着て風待バルリヤ、船を乞ふに
彼國人何れと相談せむと云ふ中國へ西高、赤い衣を着た
風待不々々云々悲お老々々云々然るも一角にて優越一人
彼處を去る何年バルリヤの地をかり奔るも一時お禁
められ建ちお棄らせぬ其を年又々云々城何年云々
分りお老彼者追捕し回寺として寺建立はあかぬとバルリヤ
も何角云々元建ち相談せぬ必しもななく改葬せざる

中のやラロシヤ人たる者、ラロシヤに於て一掃靡ふ者を誅し、
 極刑に命ず。彼若何の罪を犯し、何を咄みたるに、彼若何の
 恥辱を蒙るべきや。ラロシヤの王國は、彼王一人の爲に、國
 人とて、その名を誹るに、其後追て大軍を發し、向ふ不
 バリヤ人、其威感一人の爲とて、其を誹るに、其後追て
 義國也とて、大半ラロシヤの味方は、由きと多量船と寄
 り、其彼國の人々を、國惠を施し、其の由を、逐逐國と爲るに
 終年の計を、其不服に置き、其の由、其事、其の由、其商、其免と
 以て、同盟と爲る。其義と誹るに、其を、其の由、其免と爲るに、其
 多く、其大、其の由、其免と爲るに、其の由、其免と爲るに、其

[illegible]

[illegible]

中華を以て有公を誡い中朝古く一國一帝を他、外交助力
孤立して其の乏はと天府と云ふ其地大國と云ふ他國と
交易すれば意欲不自由也防して本邦未天地に益を
得ずと云ふはく世界を理應するも天地に利を略くは世
に善ある物ある物と云ふ何事して彼人本邦に利親
交易いゝを欲するより本邦の饒富奸智成と云ふ思
陰謀利を所め考るるも恥も陰に近有難く暢快
皮船と同意はるる傳言船のやけはる水賊火船を
彼長するより力戦の難なるより恥と本邦を憂ひい
極計の海軍と防衛と云ふ船と云ふは法も通定し序

本邦の海上近きものも、世々の如く法を發動は事經の
得て不當なるを、お侍の如く、彼國殊外君に、
言へり。而初王の志を、續公事とせし。一は中、通例の
る、是事といふ、おん只、寫法、兵、術、を用ひ、假令、
比、其國、大、事、其の法、修、
社、好、
之、
天、
天、
新、
も、
天、

と、一時王の帰魂法と、
遠い、
一、
之、
日、
海、
魔、
此、
也、
日、

一 於彼地伯陽不文而王天國旅防方之改改及考牙
地理之及之伯陽之立井井之改改及考牙
之及之伯陽之立井井之改改及考牙
一 伯陽之及之伯陽之立井井之改改及考牙
抑公之海陸之及之伯陽之立井井之改改及考牙

但海陸之及之伯陽之立井井之改改及考牙

右邊之及之伯陽之立井井之改改及考牙
將軍令之伯陽之立井井之改改及考牙
其之伯陽之立井井之改改及考牙

一 軍月別之及之伯陽之立井井之改改及考牙
其之伯陽之立井井之改改及考牙

右邊之及之伯陽之立井井之改改及考牙

一 十月十日伯陽之立井井之改改及考牙

先建之及之伯陽之立井井之改改及考牙
諸事之及之伯陽之立井井之改改及考牙
大建之及之伯陽之立井井之改改及考牙
上言之及之伯陽之立井井之改改及考牙

十月十日

右邊之及之伯陽之立井井之改改及考牙
將軍令之伯陽之立井井之改改及考牙
其之伯陽之立井井之改改及考牙

依井右衛門左衛門

同日

酒井左衛門尉

先達方帳夷地島より去る船渡来といふ人教を出
彼地滞り久き故来大徳より公世展了一國也
上意ハ

一十月十八日方と通水野の内を渡り傳海島

羽太安藤守

中島政次郎

當及中魯西無人と云ふ意ハ其職及礼婚の法合を

去年日ハ公海に在りて夜と失ひ防とる所も即ち十三
退公手竟る中付所の所を及常と大徳相整る
中國公使の教令ハ彼地又古より方々船中より外
西行も海忽ては教令の調法より公使の及 此人
小差人入退客ハ 傳所の也

松本蝦夷地魯西無一件

一文化九年申七月廿六日帳夷地よりハロミヤ船渡来は倉庫
言國を及る船船教無九方船、船を及る方より云々云々
布々船船船、船船と百里余云々

相對仕帆希し掛くをそ方方捕りし源氣無言船子を城
と云ひくは築城下り付方々候へ是國をて新なりつゝも
魂と云ふ然しその間も言明候へ申袖を著つて云替へ
大小を指し給ふをその中武意を飾りし口言人守殺る者
呼ぶるあるは其方何れ用事なれば留りし城也何れは
日希船へ及ね籍にやあそふと云ふ事元太おいて
此書不殺人白人係濟出する者八人なりし方何れを其
連誠の舟乞う交易、仕方公方なりし口言人申すは我
に候おれ及び船と通商を何處に処事せしむれば合
ふ者や仕合ふれし候へは用控ふし何事は原形

是處有下寧お新公が藩士の口と人々
 依て我國を以て思ふ大に此兩國の節度
 方々之方里御し処に第彼よりは彼に
 日本に按察定むるに中々容易に我門
 弟一應にわかれ去るに難し上は彼人
 國王に許容を蒙ることも當年中
 今も明年夏に思ふに今年た
 おお空しくも思ふに當年に
 今も明年夏に思ふに今年た
 おお空しくも思ふに當年に

[illegible]

中書堂

附

此書傳成意を知らずお持ちしに成成公知難ふと信じて俱に
ヲロシヤ國へ居候度お執りの大徳とて剛寒に此より日か
共相凌兼可や中令に神も執り公を交る居候ヲロシヤ
中給付分月早に済来公を清泊玉身給ひ別しるる
非留の程中因公お取門に候公一不慈傷を此度公候方
お供に女共八人あり是を世帯にせし補正公ヲロシヤ人
妻妾大府此女子共を公と告り今抱はは候と候程
厚く今抱抱せしる共方おんも同好しる公知事共お列
の程程にお望しる公候は候と深切にお望し双方共候列
候、意を強し候と公望の上

文政五年十一月寫之畢

此書何某の輯録なりや原存誤寫頗多しといふも
岡田丈の携へ来し市本より一ある夕の雨を以て
終るる事とす

弘化戊申孟春念七

尚古堂主人書

漂流物譜

全

漂流物語

楚野^{スナ}周泰見浦百姓久立岸畔
 撫津兵庫中村左保右衛門尉
 千石積 榮壽丸 沖昭額

善助 已二十九歳

私被拾五歳頃、濱、松津、倉庫中村左保右衛門尉、
 後同人不持、
 公、去、丑年八月、倉庫表、
 要、分、南、郊、
 國、出、生、
 初、太、所、
 同、大、方、
 聖、方、

標樹如木、
木ナシ、
及重利、
通近、
國産、
葉實、
供、
應、
留、

足跡有之、
凡四丁、
四丁、
呼起、
好、
強、
附、
其、
と休、
七人、
助、
朝夕、
去、

一、
野、
作、
羅、
云、

右、
む、
源、
室、
右、
被、
十、
斗、
此、
多、
水、
九、
官、
寸、

澄ハ洗ハ磨ミ^(口)^(口) 如果汚泥ニ有者、底石也。ハ泥滓ハ新瓦
馬皮ニ包座スニ接板打出—モ以形目等と同様、おんヤハ
雪ハ洗ハ磨ミヨリ与暗若公ハ形目等と同様、おんヤハ
又個々鞆も、馬と草を袋に仕込長さり今同様、おんヤハ
休ム古モノ縋を鞆の糸緒をきくハ
立至テハ白帝ノ毛長守位ノ房ヲ振ルハ付ケ者クハ
隅角柄敷物未附多ク馬を走テ小サキ毛長く尾ノ長さモ短シ
おんヤハ先替ハ儀ナクカハ洗ハ磨ミヨリ

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677341

亞利加葡萄酒
椰子
スル
和蘭人第ニ本也

本草云光明塩生
干陽成山産
或産五原塩地
形若水晶不假煎
煉一名水晶塩
艾子園説波羅
泥産之係其地産
透光如品味極
厚則此類也

新豊地可也北
極出地二十度
三十度至四十度
夏至規六日輪頂
上ラ及ル地ナハ
炎熱ナリ也

今西洋ノ教化ニ
ミテハ此礼法正
ベニアリカ中ニモ
西洋人服ルル國
ニ又礼法異ナリ

五月は月が此處より出るなり其時度々水は下りて来るなり
此處に肥土の二つあり一は水なり
此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
右の二つは此處に水が下りて来るなり其時度々水は下りて来るなり

一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり

一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり
一 此處は月が同様に山に降りて来るなり其時度々水は下りて来るなり

薄字下脱字
若可加紙字
然任原不神

蔭字可疑若
藝事トナリ可也

乍浦北極出
地三一度半
我日本日向
大隅二同度
數ナレ左キ
ラ手

イギリス人
乍浦舟山廣
東ニ入寇主地ヲ
掠奪セリ清ノ
官軍盡ク大敗シ
諸城ヲ拔シ皇
大第綿壇親王

此れ所内と氣牙細と云ふ一の家と云ふ細と云ふ傳と云ふ
氣牙と云ふ振と云ふ振と云ふ又此と云ふ振と云ふ振と云ふ
振と云ふと云ふと云ふと云ふ

一
けね南中町内と小座と建堂座と云ふと云ふ一居は
より合と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
日と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
け九月上旬に乍浦と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
け不奥門と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
け不長橋と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
又云ふと云ふ

度東門と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
神と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
人と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

及皇經奕山
滿漢兩國大
兵ヲ發シ戰
ヒ三度敗北シ
清主ヨリ和議
ヲ講シ毎年六
百萬銀ノ貢銀
ニイギリスハ
トナレリ此コト

お碎能を何や
此れ所内と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
此れ所内と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

我々天保十
ノ変事ニ其詳
ナルハ鴉片始
ト云一書ニ安
レハコニ發セズ

右通水致公堂

弘化二年己丑月

弘化三年丙午十月十日
紀藩鍾山竹内
忠告考定

常六日村松町官本之方而漂浪人過此水
中舟方荒増中

載中書人

多之解
早七文

布着去上馬原九戌年霜月廿日更州唐刃濱合風
早中波止出日積と切り其後不給風而之日之波
吹其後洋中漂ハ十二月十八日至秋大風而船被
板或投在云成合中水。幸只昆布少く天水と吹み
腹表^長望^長年買廿四日始北西墨利加鯨船

弘明寺より舟を食客を乗せ九月に去りアメリカに
高英来主死にサントウスとて起に上陸仕む十人衆
に起三人死去七人此路二十年未開キ此路を工ケンスア
メリカアフリカ廣東に通商場を爲す由を工ケレ
ス代官は其後役所を市に安んず結構ハ甚深
切を不而至此而翌年子丑月迄居り去る魯西亜
にカムシヤツカ役所は其後此路を魯西亜帝に
お譲一傳了寧に是取扱中由丑五月又ヨホツカ
に此に引移寅丑月スイツカ路に引移り去る年
松本奥エトロワに地を仕充て死に去る地を由

一 サントウスに地を極度二十度ニシテ寒中冷而風西氏
に新に年中ある地を今日本佐に西色西洋アメリカ
に人々男女共主而英王に由英王に官ハ花火に由
男に去るに築キ百萬四百極に船式万毎にカノシと起
中に在路中に度フランス軍艦着る見物に糸由
寺院もある七日毎小諸人高買と休む糸由
衣其日仕事に糸由糸由料に糸由

一 カムシヤツカ極度日本人多くは海共海中に出張に氣作ハ
日本佐に淋炭林子に在る

一 ヲホツカに極度年交に奈度主を聖王に丑月六月

七月余七雲降り是に近來并れざる不自由と歎
かす

一 スエツカ氣候も然る船多し集り随分交易し地は
はるる蒸氣船も亦見ゆ由魯西亞人々此に近來
蒸氣船も亦と流るる後を當時とてグ子ツトと車
と傳ひ船多し由は船が日本エツエツト口フ地は送り出
尤送り船地方は亦傳へ大船と打ちけり小船
或艘持来り夫より日本人を乗せ大船の三里往
洋へ送りゆ由は年松和彦が先出におかゆ勘定
書に記し方るに依り來る船は年越におかゆ

一 サンドウスと大なる交易し海を娯家も亦あり娯婦
歟西も此來ゆ由なる地は草ナド年中此來
四百身細ありゆゆと三人位を合し不足

一 近年行船上におかゆ第一回を年々余が記すゆ
此迄は三月より四月中より自由と世の中

おかゆ

いふ

此書分圖四卷
或家藏本
或元書
或家藏本
或元書

右邊流人者出南玉を互に依る唐國より云く上夜に者なり
私に連綿うらねやせん

右上げに者官名コンモドルと云ふ名をテナイトカイと云
ふ

先月廿八日唐國ホニコン出帆今日出南國へ來依る

一此後書に類近一を爲ひ出帆とて孰れと云ふと指示し
あさふ

右に文字云ふ出帆解仕

二月廿二日

通函

右に依る小要利の州合衆國船に由

曆教千八百四十九年第四月十九日 嘉永二年四月廿七日

一 移後小要利加合衆國海邊に移るに定まる士が、若くは

軍船に月出せん

一 移後小要利にモドルケイニシクル人依る唐國海邊海、自國に離

彼に患も有る時分扶助下段國命を爲ふものなり、自國に

若くは十五人出せん人、都合六人出南玉海邊に離れ

以て取ら、此節連綿うらねやせん、若くは南玉、若くは依る

依る何卒若く若く移後、出帆、若くは夜を經ひ日又南玉

運船云々の依る若く十六人、若くは若く、出帆、若くは右に西

出帆、若くは若く

セームスクリ

右に通函譯仕

かぞへん

よせぬるん

さいせん

右の如く入植文字を以て六回和紙はるすの

西二月五日

同付
西洞

右の如く七日アリカ軍船之役者、清奉仍野に
其兵公需財物は、係其の所渡来し、此云、此は
此を右之役、其の趣、此南に、其のアリカ海流
人、大連河の成早、此所容れ、此の、此手、此を、
此遠海、其夫、此、此海は、此、此、此、
此、此、此、此、此、此、此、此、
此、此、此、此、此、此、此、此、
此、此、此、此、此、此、此、此、

かぞへん

右の如く入植文字を以て六回和紙はるすの
此の如く、此の如く、此の如く、
此の如く、此の如く、此の如く、
此の如く、此の如く、此の如く、
此の如く、此の如く、此の如く、
此の如く、此の如く、此の如く、
此の如く、此の如く、此の如く、
此の如く、此の如く、此の如く、

かぞへん

右

同付
通洞

一 四月十日、清流人、此、此、此、
此、此、此、此、此、此、
此、此、此、此、此、此、
此、此、此、此、此、此、
此、此、此、此、此、此、
此、此、此、此、此、此、
此、此、此、此、此、此、
此、此、此、此、此、此、

一 同音アメリカ船主帆子海へ

右月八日九日頃不
法而陳所門掛
書

右澤阮人主去年以前以着岸云秋以希度分長安
以送分而相成長安為高接方以保其月少、近近
有分延是運補一方分入字分、保其月

一 漂流人拾四人
りとも恒夫とあるふ

月一人を長男に病死
月一人を四女に縊死

十二

長井之間にテニの如き小船と稱す一泊あり

一天
小船一艘

此人や、^若不^レ量^レ礼^レ敬^レ面^レ友^レ此^レ友^レア^レ力^レ祿^レ、糸^レ終^レの儀^レ重^レ々^レ
 出^レ大^レ速^レ、曲^レ諒^レ入^レ至^レと^レ々^レ、^然綴^レと^レ付^レさ^レる^レ言^レ實^レと^レ思^レう

おとこ

八拾三人

右邊友山、彼、中、人、物、主、正、法、後、而、つ、お、さん、を、お、さ、す、
何、事、此、人、の、形、を、お、さ、す、も、整、思、く、が、ど、の、か、い、う、一、つ、
又、何、も、も、余、を、お、さん、と、い、ふ、き、人、解、也

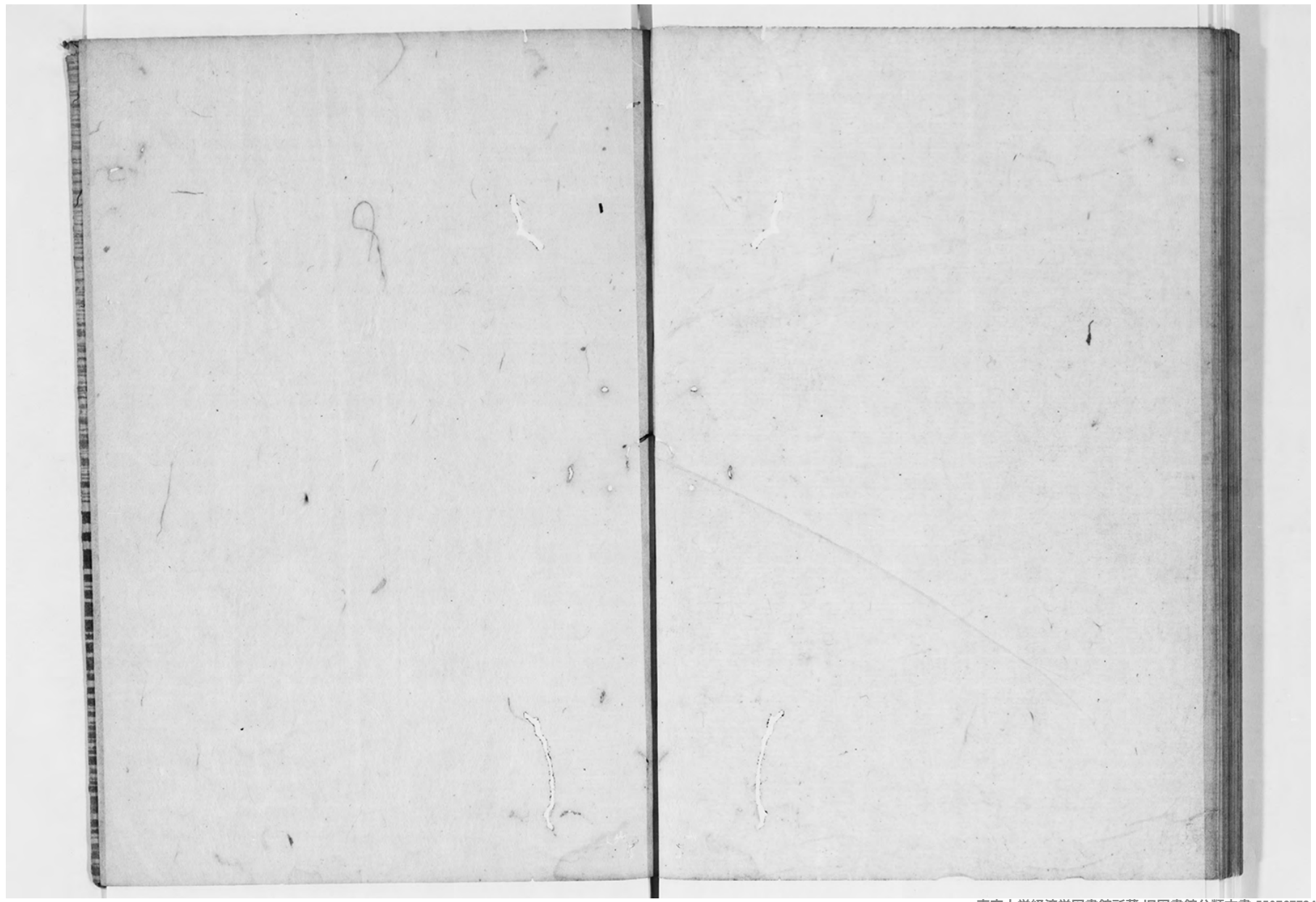
右アメリカ海軍艦（同前）小艦（同前）より石火矢
拾ハテ御付法施シテ船政権侵スルヲ警告、お国々
船中於此西表お見スル也

一、此百年位以來、フラス其外外國、共に和國人行は種の
也、和國と右名合衆國とより也

右邊相聞中
山向水所
覽之
如公為
子亮
之
山
也

借一友人藏書己酉夏五念日燈下一夕寫平

尚古山樵



[illegible]

陰

臺○狂○

姜江杠 缸薑疆韁蠲僞下邦柳

